演題　3

乳腺に発生した悪性リンパ腫の１例

済生会熊本病院　中央検査部病理

○鮫島　彩香（ＣＴ）杉野　佳澄（ＭＴ）木下　史暁（ＭＴ）松本　直子（ＭＴ）

近藤　妙子（ＣＴ）松岡　拓也（ＣＴ）中川　美弥（ＣＴ）田上　圭二（ＣＴ）

神尾　多喜浩（ＭＤ）

【はじめに】

乳腺原発悪性リンパ腫は全乳腺悪性腫瘍の 0.04～0.5%，節外性非ホジキンリンパ腫の約 1.7%と非常にまれな腫瘍である．

今回われわれは，乳腺に発生した悪性リンパ腫の１例を経験したので報告する．

【症例】

患者：50 代，女性．
主訴：右乳房の腫脹，熱感．
既往歴：高血圧，慢性関節リウマチ．
現病歴：１ヵ月程前から右乳房の腫脹と熱感を自覚し，近医を受診された．針生検で悪性リンパ腫が疑われ，当院の腫瘍内科を受診された．

右乳房ＡＣ領域に７㎝大の球状に突出した弾性軟な腫瘤を触知し，皮膚発赤を伴っていた．超音波検査では内部に豊富な血流信号を有する７×６㎝大の楕円形腫瘍を認めた．確定診断のため，生検および捺印細胞診が施行された．なお，血液・生化学検査ではＬＤＨ 694U/mL，ｓＩＬ-2Ｒ 5660U/mL と上昇していたが，他に異常所見を認めなかった．

【細胞所見】

壊死や成熟リンパ球を背景に，その２～３倍大の中型～大型細胞が単調に増殖し，孤立散在性あるいは細胞間結合の緩やかな平面的集塊として出現していた．Ｎ/Ｃ比は高く，しばしば裸核状を示していた．核の大小不同が目立ち，核形不整や核縁の切れ込みを認めた．核クロマチンは細顆粒状で増量し，１～数個の著明な核小体を有していた．ギムザ染色では，複数の核小体が目立ち，クロマチンの細かい類円形核と好塩基性細胞質を有する大型細胞が孤立散在性に出現していた．細胞診上，悪性リンパ腫が疑われた．

【組織学的所見】

核線を伴いながら，明瞭な核小体と大型淡明で切れ込み不整の目立つ核を有する大型リンパ球様細胞がびまん性に増殖し，集塊を形成しており，多数の核分裂像やアポトーシス小体を認めた．免疫組織化学的に大型細胞はＣＤ20 と bcl-2 強陽性，ＣＤ3 とＣＤ5，ＣＤ10 陰性であり，ＣＤ3 ・ＣＤ5 陽性のＴリンパ球が反応性に浸潤していた．以上の所見より，びまん性大細胞型Ｂ細胞リンパ腫と診断された．

【考察】

乳腺悪性リンパ腫は，原発であれ二次的浸潤であれ，まれな腫瘍である．その大半はＢ細胞リンパ腫であり，びまん性大細胞型とＭＡＬＴ型が多い．超音波検査などの画像検査では，乳腺悪性リンパ腫の像が多彩であり，特徴的所見に乏しい．そのため，術前診断には生検組織診断が最も有用とされ，細胞診における正診率は 30～40%と低い．

鑑別診断として，髄様癌，小葉癌，浸潤性乳管癌が挙げられる．浸潤性乳管癌や小葉癌では，細胞異型は乏しいものの，木目込み細工様の所見など細胞間に接着性がみられることから，鑑別は容易である．また，髄様癌では大型の腫瘍細胞が出現するものの，背景のリンパ球に異型がみられないことから，鑑別することは容易である．

自験例は，生検の組織学的所見と免疫染色の結果から，悪性リンパ腫と診断された．しかし，捺印細胞診でも細胞の結合性や腫瘍細胞の背景に着目すれば，組織型推定が可能であった．

乳腺悪性リンパ腫というまれな疾患も念頭に置き，注意深く観察することが重要であると考えられた．